

【共同研究】

『感情イメージ調査』についての研究（V）

—— 諸対象に対する感情価とイメージの鮮明度との関係 ——

鈴木 賢男* 大石 昂** 松野 真*** 堀内 正彦**** 鈴木 国威*****
大平 泰子***** 藤森 進***** 岡田 斉*****

Research on the Questionnaire on Affective Imagery (QAI), 5th Report:
The Relationship between the Affective Valence of and Vividness of Mental
Imagery Produced by Words for Objects or Experiences

Masao SUZUKI, Takashi OISHI, Makoto MATSUNO, Masahiko HORIUCHI,
Kunitake SUZUKI, Taiko OHIRA, Susumu FUJIMORI, Hitoshi OKADA

This is the 5th report of a series of studies on the Questionnaire on Affective Imagery (QAI). Developed by Takashi Uesugi (1981, 1982, 1983, 1989, 1998, 2000), the QAI pairs words for feelings with words for objects or experiences and asks respondents to rate the mental imagery that they produce. The QAI features 8 words for feelings: joy, hope, love, surprise, sadness, anger, fear, and hatred. These words are then paired with 16 words for objects or experiences: me, father, mother, husband, wife, family, home, relative, hobby, health, trip, friend, lover, life, school, and society.

Results for 114 subjects indicated that the coefficient of correlation between the vividness of visual imagery and affective valence of words for objects or experiences was $r = 0.43$. The coefficient of correlation with auditory imagery was $r = 0.36$, and the difference was statistically significant at a level of 5%. No other correlations were noted. Therefore, the relationship between the affective valence of and vividness of mental imagery produced by words for objects or experiences operates selectively.

Key words : affective imagery, affective valence, mental imagery, vividness

はじめに

心像化にともない怒り・悲しみ・不安・恐怖などの強い情動を喚起させる心像は情動心像 (emotional imagery) と呼ばれているが (小泉, 2005)、時に、affective imageryとも表わされ、情動イメージや感情イメージと訳される場合もある。いずれにせよ、これらは同等の意味として扱われている。しかし、上杉 (1989, 2004) が定義している感情イメージ (affective imagery) は、以上とは異なる観点に依拠しているものと思われる

* すずき まさお 文教大学人間科学部非常勤講師
** おおいし たかし 富山国際大学子ども育成学部
*** まつの まこと 千葉県健康福祉部児童家庭課
**** ほりうち まさひこ 駒澤大学文学部
***** すずき くにたけ 大阪人間科学大学
***** おおひら たいこ 富山国際大学子ども育成学部
***** ふじもり すすむ 文教大学人間科学部心理学科
***** おかだ ひとし 文教大学人間科学部臨床心理学科

る。その観点は、着目する感情現象の違いと、説明に要する感情理論から生じることになるが、それ自体が問題提起を含むものであり、慎重な考察が求められる。

近代において、感情現象を心理学の主題として取り上げたのは、W. James (1884) であるが、後のCannon (1927) による批判も含め、主たる感情現象の要素である身体反応と主観的経験のどちらが先行するのか、ということが討議上の問題となっていた。主観的経験に先行する、もしくは同時に並行する身体反応の状態を理解することが感情現象の関心事となっており、主観的経験はそれ程重視をされてはいない。

また、その後、認知の働きに着目した感情理論が登場するが、やはり、主観的経験そのものの意味よりも、感情が生起するための根源に関心があつたようである。情動二要因説 (Schachter, & Singer, 1962) は、身体反応の理由が自明でない場合に発動する認知過程によって、後付けのように感情がラベリングされる状態を、認知的評価理論 (Arnold, 1960) では、そもそも身体反応が生じる前に、知覚される刺激が情動的刺激として弁別されるであろう状態を仮定した。Arnoldが提案した評価という仕組みは、無意識的に極めて瞬間的に刺激の有害性・有益性を判断するものとされ、神経科学的な証左とも符号しており、大脳の皮質下にある扁桃体を介した神経経路によって、感情的刺激の素早い検出が可能になっていることが確かめられている (LeDoux, 1996)。

しかしながら、これらはいくまでも、情動的刺激に対して典型的な感情 (怒り・恐れなど) 反応が生起する過程を扱うものであり、同時に、あるいはその後に得られている、対象と結びついた意識的な感情経験 (主観的経験) の意味については言及していない。Damasio (1994) は、後者のような感情状態を情動emotionとは分けて、フィーリングfeelingという言葉で表している。

この点に対して、一つの解答を与えているのが、感情における次元理論となる。次元理論では、一般的に感情とされている内容 (喜びや悲しみなど) は、快-不快と活性-不活性のような少数の次元に還元できるとし、この2次元で定義できる神経

生物学的実体をコア・アフェクトと命名した (Russell & Feldman-Barrett, 1999)。一般的な感情は、これとは異なり、知識的な構造をもつもので、言語や文化、社会などを通して、その意味が諸対象と結びつけられることで人間的感情となる。身体反応の受容を伴う主観的経験は、経験的に発達的に感情の知識化の基盤となるものであろう。

このように感情現象全般には、感情特性 (身体反応や感情経験) の要素間での先行や基本的な感情の生起、その後の一般的な感情の形成を観点とする問題があり、解明を試みるための様々な感情理論が今までに提示されてきている。ところが、上杉 (1984) が提起した感情イメージは、この枠組みではとらえられないことを問題としている。普段の日常生活の感情現象の対象となるもの (人・物・事) とは、同じ対象 (家族や友達など) に対して、数えきれないほどの様々な感情体験を繰り返しており、結果として、その対象を現前にする以前に、接する前に、自分の感情状態を予測することが可能になっている。

未来の出来事に対する自分の感情反応を予測する能力は感情予測affective forecasting (Gilbert et al., 1998) と呼ばれているが、記憶やその他の認知活動を経て構成された予測される感情状態は、果たして、実際にその対象による何らかの作用を現前として受けた際に生じる感情状態とを同じものかと言っているのだろうか。概念上の定義は別として、少なくとも上杉 (2004) は、前者を感情イメージと命名し、後者を通常の感情として、両者の感情状態が異なるのではないかと問題提起している。

本研究は、感情イメージ研究のための調査方法として考案されたイメージ調査法 (上杉, 1981) の有意性や有効性を検証していくことで、「感情イメージ」が表わす概念内容を明確にし、研究の更なる展開を目的とした一連の研究の第5報となる。第1報から第2報までは、イメージ調査法を復元することを主として、要素的な感情として取り上げられた喜、悲などを含めた8感情の感情間の構造が年代間において同一の構造を示し、数量的に変動が小さく安定していること、8感情を合成した感情価を基にした諸対象の関連性もほぼ

類似していることを確認した。更に、感情価は、パーソナリティ検査（NEO-FFI）との関連性があり、協調性が高いものほど、多くの対象群の感情イメージがポジティブであることを示すことができた。

第3報から第4報では、回答者の負担を軽減化することを主として、32対象語と8感情語の256対にもおよぶ調査項目を比較的安定した数量的構造性を保つ対象語16語を選定することで減らすことができた。第4報では、対象に対するポジティブ・ネガティブ性を示す感情価が4感情（喜・嫌・怒・恐）で十分に予測できることを明らかにした。そこで、第5報以降では、新たな視点に立つことにし、種々の感情イメージの特性を調べていくことを主眼とし、まず最初に、諸対象についてのイメージの鮮明度と感情価との関連性を見極めることにした。以上を、研究Ⅰ～Ⅱの全体的な目的とした。

方法

1. イメージ調査法

イメージ調査法では、上杉（1979）によって開発された独自の調査用紙（イメージ調査票）が用いられた。この調査票は、感情研究としてのSD法と、創造性開発技法としてのKJ法（川喜多次郎, 1965）からヒントを得ているものであり（上杉1981）、対象語（ex.私、父、母など）と感情語（ex.喜、愛、悲など）を対にして示し、対象語の具体的内容（すなわち、各人の体験の中にイメージとして存在している内容）としての「対象」をイメージさせ、その「対象」のイメージと、感情語からイメージされる感情イメージの<近さ-遠さ>を、5段階で主観的に評定してもらうものである。

対象語は、鈴木ら（2010）によって選定された学生の日常を取り巻く基本的な諸対象となる16語、感情語については、旧来通り、8感情を各々漢字一文字として表わした（Table 1）。したがって、対象語と感情語の対は128対となるが、その一部を、Table 2に表した。なお、対象語と感情語の対提示の順番は、新たに無作為に決定し、これを用いた。

Table 1. 感情語と対象語

【感情語】8：旧来法による感情語							
喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
【対象語】16：選定した対象語							
父	母	恋人	友人	仲間	家族	家庭	親類
学校	集団	社会	生活	遊び	趣味	旅	健康

Table 2. イメージ調査票（その一部）

		近い	やや近い	えんない	どちらともい	やや遠い	遠い
1. 社会	— 望						
2. 友人	— 怒						
3. 健康	— 驚						
4. 集団	— 喜						

2. イメージ鮮明度の調査

イメージ鮮明度は、感覚別に分けて質問した。①視覚：姿・形、②聴覚：声（音）、③嗅覚：臭い（香）、④体内・体感：力（重み）、⑤触覚：接触（感触）、⑥運動：動き（変化）の6つのカテゴリに応じて、「以下の対象の○○（例：姿（形））を想像したとき、どの程度明瞭に鮮やかに感じることが出来ますか？」を16語の対象語それぞれに対して、「完全に明瞭で鮮やか」～「全くイメージできない」の5段階で回答させた。

3. 対象者

対象者は、文系のX大学大学生であり、男性62名、女性52名、計114名であった。平均年齢は、男性が18.2才、女性が18.2才、全体で18.2才（SD=0.44）となっていて、ほぼ全員が1年生であった。

4. 手続き

イメージ調査法の調査実施期間は、2012年4月18日～23日で、調査票を一斉に配布し、その場で回答してもらった後、即回収をした。調査用紙に記載された教示は次の通りである。

次のページから、全部で4ページにわたって、1～256のことばの対があります。左側はいろいろな対象や事象を表していることばです。右側のことばは、感情語です。

各対について、左側の対象や事象を具体的にイメージしたとき、あなたにとって右側の感情が「近いもの」であるか、「遠いもの」であるか、そのびったりするところに、○印をつけて下さい。

イメージ鮮明度の調査は、Webページのフォームへの入力によって実施した。調査実施日は、2012年7月18日で、教室にある複数のパソコンの画面内にフォーム形式のWebページを一齐に表示させ、その場で回答・送信をしてもらった。

研究 I 感情構造と感情価

1. 目的

一般的な生活を取り巻く対象に対しての諸感情の構造的性、第1報から第4報(2008, 2009, 2010, 2011)まで確認されてきた。イメージ調査法で得られる対象語ごとの8感情の評定値は、その対象に関してある感情が近いと思うか遠いと思うかで判断されており、感情語の数が8語でも16語の時でも、対象語の数が16語でも32語の時でも、同様に、対象に対する感情は、プラス感情ーマイナス感情という次元で構造化されることがわかった。また、各感情の次元に関する負荷量も比較的安定したものになっており、これを重みづけとした対象における感情の評定値を合成して感情価に基づいて、対象間の関連性を検討してきた結果、概ね、家族に代表されるような近親的对象、友だちや学校などによって構成されるような共同的对象、遊びなどで表わされるような開放的对象の3つの対象に集約されることがわかった。そこで、ここでは、以上と同様な方法に基づいて、感情構造と感情価について検証しておくことと、対象の構造についても確認しておくことを目的とした。

2. 分析

(1) 諸対象に共通する一般的な感情構造をもとめるために、8感情(8変数)を“列”とし、対象16×調査対象者121=1,936件を“行”とするマトリックスを構成し、8感情間での相関行列を得る

ことで、因子分析を行った。固有値1.0以上を基準とした主因子法による2因子を抽出し、その後、回転バリマックス解を得た。累積寄与率は、42.3%であった。

(2) 主因子解で正負両極の構造が見られる因子(多くは第1因子)の因子負荷量を重みづけとして、8感情の合成得点としての「感情価」 $Tij(8)$ をもとめた。 $Tij(8)$ は対象 j に対する調査対象者 i の感情価で、

$$Tij(8) = \left(\sum_{k=1}^8 Wjk(8) \times tijk(8) \right) \div \sum_{k=1}^8 |Wjk(8)| \times 10$$

として定義される。ここで、 $Wjk(8)$ は対象 j に対する8感情における感情 k の重みづけであり、16対象語の8感情についてのそれぞれの因子負荷量を意味している。 $tijk(8)$ は調査対象者が対象 j をイメージして、感情 k との<近さ-遠さ>を評定した評定点で、「近い」=+2点、「やや近い」=+1点、「どちらともいえない」=0点、「やや遠い」=-1点、「遠い」=-2点として数量化したものである。また、それぞれの重みづけの絶対値を合計した値で除算し、それを10倍することで、理論値としての「感情価」は+20~-20に分布することになった。

(3) 8感情を用いて対象ごとにもとめられた「感情価」によって、16対象間の相関行列を得ることで、最尤法による因子分析を行い、固有値1.0以上を基準として、3因子を抽出したのち、回転バリマックス解を得た。累積寄与率は71.0%であった。

(4) 同一因子内の感情価を合計した後、因子を構成する対象の数で割ることによって、一対象分に換算された感情価を算出し、これをその因子の感情価尺度得点とした。

3. 結果

(1) 対象語を区別することなく、全対象に対して行った8感情における因子分析の結果をTable 3に示した。主因子解の第1因子は、正負の符号が認められる二極構造を示しており、一側に、感情語の「喜(-.59)」「望(-.38)」「愛(-.41)」、+側に「嫌(.75)」「怒(.67)」「悲(.68)」「恐(.66)」、そして、「驚(.28)」は他の感情語よりも比較的

0に近い値になっていることがわかった。また、第2因子負荷量は、「喜 (.45)」「望 (.45)」を筆頭に、一極的な次元を示しており、「驚 (.33)」「愛 (.31)」「恐 (.28)」「悲 (.22)」「怒 (.19)」「嫌 (.02)」と続いていることがわかった (Table 3.)。感情構造の次元や各感情の符号、負荷量の大きさには、極端な変化は認められなかったが、「驚」の第1因子の負荷量は、第1報 (2008) 以来の0.02~0.08程度からは外れることになった。

Table 3. 対象語を区別しない場合の8感情因子負荷量

N=121 感情語	主因子解		リマックス	
	F1	F2	F1	F2
1. 喜	-.59	.45	-.19	.71
2. 望	-.38	.45	-.02	.59
3. 愛	-.41	.31	-.14	.49
4. 驚	.28	.33	.42	.10
5. 恐	.66	.28	.69	-.18
6. 悲	.68	.22	.67	-.24
7. 怒	.67	.19	.64	-.26
8. 嫌	.75	.02	.60	-.44

(2) 諸対象における感情価の平均値と標準偏差をTable 4の右側に表示した。感情価の最も高かった対象は、「趣味 (13.7)」と「遊び (13.6)」となっていて、引き続き「仲間 (13.5)」「家庭 (13.2)」「友人 (13.1)」と同程度の高さになっていた。感情価のスコアが10.0以上であるものが16対象中14対象あった。また、「社会」の感情価が著しく低い4.5を示しており、概ね、他の対象における感情価の半分以下となっていた。また、「社会」の感情価の標準偏差が7.40であることから、「社会」に関しては、感情価が負の値を示す者が一定数以上いることがわかった。

(3) 諸対象の感情価に対して因子分析を実施した結果をTable 4の左側に表示した。開放的对象として分類された構成要素のうち、近親的对象の因子負荷量の方が高くなっているのが「趣味 (.57)」「恋人 (.51)」であり、共同的对象の因子負荷量の方が高くなっているのが「健康 (.55)」「旅 (.51)」であった。これらは、本来の数量的基準

に従うと、第4報 (鈴木ら, 2011) で示された因子構造と異なってしまったために、同一の構造となるように、ひいては了解可能な構造となるように、次善の選択として、属する因子を変更した。共同的对象として分類された「仲間」も数量的基準からすれば近親的对象となるが、上記の理由により、これを共同的对象とした。

Table 4. 感情価を指標とした対象語の因子分析回転解

対象語	回転解因子負荷量			感情価	
	開放	近親	共同	平均	SD
遊び	.81	.39	.37	13.6	4.97
趣味	.51	.57	.26	13.7	5.08
健康	.43	.24	.55	11.4	6.32
旅	.48	.23	.51	11.8	6.24
友人	.56	.51	.50	13.1	5.31
恋人	.40	.51	.32	12.1	6.01
家族	.15	.88	.22	13.0	6.12
家庭	.29	.87	.32	13.2	6.14
父	.14	.66	.21	10.8	7.40
母	.30	.77	.26	11.5	6.30
親類	.34	.73	.25	12.0	5.57
集団	.22	.19	.90	7.8	6.32
社会	.14	.20	.64	4.5	7.40
学校	.22	.40	.70	10.3	6.24
生活	.40	.36	.66	10.5	5.71
仲間	.48	.55	.52	13.5	5.83

(4) 上記 (3) で表わされた3つの因子を構成する対象の感情価を合成して尺度得点化したところ、近親的对象の感情価は11.9 (SD=5.72)、共同的对象の感情価は9.3 (SD=5.40)、開放的对象の感情価が12.2となっており、近親的と開放的な対象に対する感情価が同程度に最も高い値を示していたことがわかった。

4. 考察

感情間の関連性 8感情間の関連性は基本的に変わることがないことが認められたが、本研究における「驚」の主因子解第1因子負荷量の値0.28は、0というよりは、一定程度の量を示していることを認めざるをえず、「嫌」「怒」と符号が同方向であることから、「驚」はややマイナス感情としてとらえられていることが示唆されることとなった。これによって、第4報までとは異なる特

徴が示されたことになるが、実は、上杉(1981, 1982, 1983)が示した「驚」の負荷量0.16~0.44の方に近い値を示した結果となっている。「驚」という感情は、対象や対象の置かれている状況によって、ポジティブな意味を持つ場合もあるし、ネガティブな意味を持つ場合もある。その意味では、変動しやすい性質をもった感情で、場合によっては、大きな出来事や社会的変化に作用を受けやすい感情なのかもしれない(鈴木ら, 2008, 2009)。2011年3月11日に起きた東日本大震災や二次災害としての原子力発電所の水蒸気爆発に対する「驚」は一方ならぬものがあり、日本社会全体のムードmoodを変えたとも言われているが、このことが何らかの影響を及ぼしたと考えることも十分できるだろう。

また、本研究では、第4報までにはない特徴が、感情構造の面だけでなく、感情価についても現れている。「遊び」や「趣味」の感情価が最上位の方を占めている現象は変化しておらず、感情価の平均値も概ね13.0程度で同様になっている。ところが、本研究では、第4報(鈴木ら, 2011)と比較して、2ポイント程度以上の平均値の上昇を示す対象が軒並み増えている。これらの対象は、「友人」11.5→13.1、「恋人」10.4→12.1、「家族」11.6→13.0、「家庭」11.7→13.2、「父」8.4→10.8、「母」8.4→11.5、「親類」9.3→12.0、「仲間」11.7→13.5となっており、いずれも身近な人を表わしている対象であった。このことから、身近な人全般に対して、ポジティブな感情を抱いている方向に感情価がシフトしている傾向にあると考えられた。上記の考察同様、社会全体が大きな負の出来事を体験したことによって、身近な人との絆や連帯を意識するなどの影響を受けてのことかもしれない。

対象間の関連性 感情価を指標とした対象間の関連性は、様変わりするほどの変化があったわけではないが、それでも第4報とは異なる特徴が現れたと言わざるを得ない。「趣味」や「恋人」が、開放的对象から近親的对象への関連性を一定程度強めたことが示されており、「健康」や「旅」が、開放的对象から共同的对象へと関連性を強めたことが表わされている。本来、開放的对象は、個人

の生活を広く拡張していく、まさに個人的な対象として意味づけられていたが、かたや近親的な相互に支える関わり、かたや共同的な相互に協力をする関わりを意味する方にシフトしていることが考えられ、いずれにせよ個人的なものから人との関係を意味する対象として、開放的对象の多くがその意味を多少なりとも変動させている可能性があることを示唆するものとなった。

一方、感情価を因子ごとに合成して尺度得点化したものは、因子の構成を、数量的基準ではなく、了解しやすい第4報と同じものとしたが、その結果、両者の間にはほとんどと言っていいほど変動が認められなかった。開放的对象(今回12.2, 前回11.4)、近親的对象(今回11.9, 前回10.5)、共同的对象(今回9.3, 前回7.9)の順に感情価尺度得点が高く、順序は保たれていた。ただ1ポイント程度、全体的に、尺度得点が増している傾向にあることも示されるところとなった。

研究Ⅱ 16対象のイメージの鮮明度

1. 目的

一般にポジティブ感情をともなうイメージは鮮明に想起され、ネガティブ感情をともなうイメージの鮮明さは抑制される傾向がある(松岡, 2005)とされているが、上杉(1981)の言う感情イメージに関しては、イメージの鮮明度との関連はまだ調べられていない。生活を取り巻く身近な対象について日常的な感情体験を通して形成され、記憶やその他の認知活動を経て構成された予測される感情状態と、当該の対象を単純に思い浮かべてイメージをした際の鮮明度との間に、関連性はあるのだろうか。鮮明なイメージが感情を喚起することや、感情を喚起することが鮮明なイメージを生じさせるという作用の問題ではなく、普段の日常生活で関わる身近な対象をイメージすることは、鮮明度の問題と感情(感情イメージ(上杉, 1981))の問題とが分かちがたく結びついているものと考えられないだろうか。そこで、本研究では、両者を異なる時期に測定し、両者に関連性が認められるかどうか、関連性が認められる

としたら、どのような感覚モダリティにそれが認められるのか。また、ポジティブ・ネガティブ次元とは異なる感情特性においても、鮮明度との関連性が認められるのかを検討することを目的とした。

2. 分析

(1) 方法2で調査した「遊び」「趣味」「健康」「旅」「友人」「恋人」「家族」「家庭」「父」「母」「親類」「集団」「社会」「学校」「生活」「仲間」の16対象に対する①視覚的イメージ鮮明度、②聴覚的イメージ鮮明度、③嗅覚的イメージ鮮明度、④体感的イメージ鮮明度、⑤運動感覚的イメージ鮮明度の評定に関して、「完全に明瞭で鮮やか」を5点、「明瞭で鮮やか」を4点、「一応イメージはできる」を3点、「ぼんやりしている」を2点、「全くイメージできない」を1点として得点化した。その後、研究1において、感情価に基づく対象語の因子とした近親的对象、共同的对象、開放的对象を構成する各対象語の同一の感覚についての鮮明度得点を合成し、対象語数で除算することで、因子ごとの感覚別鮮明度尺度得点とした。結果として、近親的对象の視覚的鮮明度尺度得点、同対象の聴覚的鮮明度尺度得点というように、3対象因子×5感覚の15の鮮明度尺度得点を得た。

(2) 近親的对象と共同的对象、開放的对象の感情価と因子ごとの感覚別鮮明度尺度得点との関連性を調べるために、ピアソンの積率相関係数を算出した。

(3) 同一対象に対する8感情の近い-遠い評定値(+2点~-2点)の合成得点が、その対象に対する感情価となるが、その際に、評定値の重みづけとなるのは、8感情についての主因子解第1因子の因子負荷量であった。これには、プラス感情の重みづけとしては符号を+、マイナス感情の重みづけとしては符号を-にしていた。これに対し、感情の対象依存性を表わすものとされた(上杉, 1981; 鈴木ら, 2011)主因子解第2因子の因子負荷量を重みづけとした、8感情評定値の合成得点を求め、近親的对象と共同的对象、開放的对象の因子ごとの対象依存性尺度得点を算出し、これと因子ごとの感覚別イメージ鮮明度尺度得点との関連性を調べるために、(2)と同様、ピアソンの

積率相関係数を算出した。

3. 結果

(1) 対象語の因子による感覚別イメージ鮮明度をTable 5に表示した。対象語の因子ごとのイメージ鮮明度尺度得点の理論値上の最大値は5点となるが、近親的对象において、最も鮮明度の高かった感覚は、「視覚(4.3)」であり、次いで、「聴覚(3.9)」であった。共同的对象では「視覚(4.0)」「聴覚(3.5)」、開放的对象でも「視覚(3.7)」「聴覚(3.4)」となった。いずれの対象語因子においても視覚と聴覚によるイメージの鮮明度が比較的高かったことが認められた。反対に、嗅覚は、相対的に鮮明度が低くなっており、特に、共同的对象と開放的对象においては2.7と、中位点の3点を幾分か下回ることになった。しかしながら、著しく低い平均を示す値は認められず、総じて、得点は中位点よりも上回っていることがわかった。また、因子間の鮮明度得点を比較すると、近親的对象についての鮮明度得点が比較的高い傾向にあることを知るところとなった。

Table 5. 対象因子における感覚別イメージ鮮明度

感覚	対象因子別平均値			対象因子別SD		
	近親	共同	開放	近親	共同	開放
視覚	4.3	4.0	3.7	0.68	0.71	0.70
聴覚	3.9	3.5	3.4	0.90	0.90	0.89
嗅覚	3.2	2.7	2.7	1.10	1.01	1.05
体感	3.3	3.1	3.1	1.01	1.02	0.92
触覚	3.3	3.0	3.0	0.96	1.17	1.03
運動	3.3	3.2	3.2	1.16	1.04	0.95

(2) 対象語の因子による感情価尺度得点と感覚別イメージ鮮明度との相関係数をTable 6に表示した。5%水準で有意な相関係数を示したのは、近親的对象の感情価尺度得点(ポジティブ感情性)と視覚のイメージ鮮明度($r=.43$)、聴覚のイメージ鮮明度($r=.36$)とであり、やや高い正の相関を認めることとなった。共同的对象や開放的对象には、有意な相関を認めることができず、特に、開放的对象は、ほとんどの感覚において、数値の上でもほとんど無相関を示していた。

Table 6. 感情価尺度得点と鮮明度との相関係数

感覚別		感情価尺度得点		
		近親的	共同的	開放的
鮮明度	視覚	.43	.22	.01
	聴覚	.36	.21	.10
	嗅覚	.22	.17	-.15
	体感	-.05	.21	-.09
	触覚	.21	.06	-.02
	運動	.12	.11	-.02

(3) 対象語の因子による対象依存性尺度得点と感覚別イメージ鮮明度との相関係数をTable 7に表示した。5%水準で有意な相関係数を示したものは無かったが、10%水準で有意な相関係数を示したのは、共同的对象に対する対象依存性尺度得点と嗅覚イメージ鮮明度 ($r = .27$)、体感的イメージ鮮明度 ($r = .27$) とであり、やや低いながらも正の相関を認めるところとなった。また、有意な相関係数とはならなかったが、開放的对象に対する対象依存性尺度得点は触覚的イメージ鮮明度との関連の可能性をうかがわせるところとなった。

Table 7. 対象依存性尺度得点と鮮明度との相関係数

感覚別		対象依存性尺度得点		
		近親的	共同的	開放的
鮮明度	視覚	.08	.10	-.12
	聴覚	.02	-.05	-.06
	嗅覚	.14	.27	-.06
	体感	.19	.27	.18
	触覚	.10	.20	.23
	運動	.10	-.03	-.06

4. 考察

鮮明度の高い感覚 イメージの鮮明度得点は理論値として取りうる範囲が1点～5点の範囲であり、ほとんど全ての鮮明度の平均値が中位点の3点程度を超えるものであったことは、全体として、普段の日常生活を取り巻く対象が比較的印象

しやすく、生き活きとしたイメージとしてとらえやすいことを示唆するものと思われた。このことは、別の観点からみれば、ある対象が日常生活の心理的な基盤となるためには、その対象のイメージが鮮明さを保つことが必要とされることが考えられた。また、いずれの対象においても鮮明度の高い感覚は、視覚と聴覚であることがわかったが、普段から、比較的優位で常時活動している感覚器官であることが関連していることを伺わせた。

感情価と鮮明度 結果から示された関連性は、近親的对象の感情価尺度得点が高い者ほど、同対象の視覚的、聴覚的イメージが鮮明であるということを示唆するものであった。したがって、近親的对象(家族や父・母)にポジティブな感情(良い感情)を抱いていることと、情報量が比較的多い視覚や聴覚などのイメージが鮮明であることが結びついていることを伺わせるものであり、近い対象との大切な関係性を確認したいという動機が両者に介在しているのではないかと考える。

対象依存性と鮮明度 結果から示された関連性は、共同的对象の対象依存性が高い者ほど、同対象の嗅覚的、体感的イメージが鮮明であるということはある程度示唆するものであった。したがって、共同的对象(学校や仲間・集団)に多様な感情(多彩な感情)を抱いていることと、直感的な判断に有効な嗅覚や体感などのイメージが鮮明であることが結びつくのではないかと考えられ、多様性が混在する対象との関係性を適切に保っていききたいという調節的な動機が両者に介在してくるのではないかと伺わせるところとなった。

結び

本研究は、感情イメージの特性を明らかにしていくという目標に基づき、同一対象語のイメージの鮮明度との関連性を検討することを目的とした。

対象語は感情価を指標として3因子に分類されたが、イメージの鮮明度もこの分類に応じて、それぞれの視覚・聴覚・嗅覚・体感・触覚・運動感覚別の得点が合成された。近親的对象、共同的对象、開放的对象のそれぞれの因子のイメージの鮮明度は、どの感覚も総じて比較的高かったが、視

覚と聴覚が中でも高いことがわかった。しかし、関連性の方は選択的に働き、近親的对象の感情価尺度得点が視覚・聴覚のイメージの鮮明度と正の相関を示すのみで、共同的对象や開放的对象の感情価尺度得点は、どの感覚の鮮明度とも相関を示さなかった。このことは、対象語の因子の特性に起因するものと考えられるが、近親的对象との関係性を形成することは、他の対象との関係性とは別の動機を生じさせ、そのことが、一方では鮮明度に関与をし、他方では感情価（ポジティブ・ネガティブ）に関与しているものと考えることができた。今後は、対象に向けられる関係性についての動機を、調査内容に組み込んでいくことを検討したい。

また、イメージ調査法で確認される感情語間の関連性と構造が、どのような要因で変動するかを検討する必要も出てきた。感情構造と、それに基づいた感情価を指標とした対象間の関連性が、主として共に安定することをねらいとして、対象語の選定や感情語の選定を図ってきたが、今回の結果では、第4報までには見られない変動を一部に示すことになった。考察としては、全国を揺るがすような大きな社会的な出来事が、対象語の感情評定に影響を与えるのではないかとしたが、もし、そうであるならば、そのことを別途調べる必要があるだろう。

参考文献

- Arnold, M. B. *Emotions and Personality*. Vol.1-2. Columbia University Press. 1960
- Cannon, W. The James-Lange theory of emotion : A critical examination and an alternative theory. *American Journal of Psychology*. 39, 106-124. 1927 (Reprinted in M. B. Arnold [Ed.] *The Nature of Emotion*. Penguin. 1968)
- Clore, G.L. & Ortony, A. Appraisal Theories. In Lewis, M., Haviland-Jones, J.M. and Barrett, L. F. (Eds.), *Handbook of Emotions : Third Edition*, New York : The Guilford Press, Pp.628-642 2008
- Cornelius, R.R. *The Science of Emotion : Research and tradition in the psychology of emotions* Prentice-Hall, Inc 1996
- Damasio, A. R. *Descartes' Error*. Grosset/Putnam. 1994
- Frijda, N.H. The Psychologist's Point of View. In Lewis, M., Haviland-Jones, J.M. (Eds.), *Handbook of Emotions : Second Edition*, New York : The Guilford Press, Pp.59-74 2004
- Frijda, N.H. and Zeelenberg, M. Appraisal : What is the Dependent ? In Scherer, K.R. and Schorr, A., Johnstone, T. (Eds.), *Appraisal Processes In Emotion*, New York : Oxford University Press, Pp.141-155 2001
- Gilbert, D. T. et al. Immune neglect : A source of durability bias in affective forecasting. *Journal of Personality and Social Psychology*. 75. 617-638. 1998
- Izard, C.E. 比較発達研究会訳 感情心理学 ナカニシヤ出版 1996
- Izard, C.E. Four Systems for Emotion Activation: Cognitive and Noncognitive Processes. *Psychological Review*, 100, 68-90. 1993
- James, W. What is an emotion? *Mind*, 9, 188-205. 1884
- LeDoux, J. *The Emotional Brain*. Simon & Schuster. 1996
- Plutchik, R. The Multifactor-Analytic Theory of Emotion *Journal of Psychology* 50 153-171 1960
- Russell, J. A., & Feldman-Barrett, I., Core affect, prototypical emotional episodes, and other things called emotion : Dissecting the elephant. *Journal of Personality and Social Psychology*. 76. 805-819. 1999
- Schachter, S., & Singr, J. Cognitive, Social, and physiological determinants of emotional state. *Psychological Review*. 69 379-399. 1962
- 小泉晋一 情動心像の情動価が心像の体験様式に及ぼす影響 岐阜聖徳学園大学紀要. 教育学部編 44, 65-78 2005
- 松岡和生 感情とイメージ 80-89 畑山俊輝編

- 感情心理学パースペクティブ 北大路書房
2005
- 上杉喬・佐々木正宏 カード式投影法による感情
因子の基礎研究 『体験と意識に関する総合研
究』第1集 文教大学人間科学研究会 15-19
1979
- 上杉喬・佐々木正宏 「俳画的箱庭」における感
情投影の基礎研究 — 試論 — 『体験と意識
に関する総合研究』第2集 文教大学人間科
学研究会 95-99 1980
- 上杉喬・松尾春代 「図式的投影法」による家族
認知の基礎研究 『体験と意識に関する総合研
究』第2集 文教大学人間科学研究会 100-
104 1980
- 上杉喬・水島恵一 図式的投影法による学生の
意識研究 『体験と意識に関する総合研究』
第3集 文教大学人間科学研究会 106-204
1981
- 上杉喬 感情イメージの研究 文教大学人間科学
部紀要人間科学研究 第3号 22-38 1981
- 上杉喬 感情イメージの研究(Ⅱ) — 労働場
面における感情イメージ — 文教大学人間科学
部紀要人間科学研究 第4号別冊 29-40
1983
- 上杉喬 感情イメージの研究(Ⅲ) — 労働場
面における感情イメージの諸関連 — 文教大学
人間科学部紀要人間科学研究 第5号別冊
11-20 1984
- 上杉喬 感情イメージの研究(Ⅳ) — 対象によ
る違いと性による違い — 文教大学人間科学
部紀要人間科学研究 第11号 1-11 1989
- 上杉喬 感情イメージの研究(Ⅴ) — SD法によ
る感情イメージの検討 — 文教大学人間科学
部紀要人間科学研究 第20号 68-77 1998
- 上杉喬・鈴木賢男 感情イメージの研究(Ⅵ)
— 感情価とパーソナリティ特性との関連 —
文教大学生生活科学研究部紀要生活科学研究
第22号 121-132 2000
- 水島恵一 実証的かつ実感的な体験研究の方法と
テーマ — 「体験と意識」に関する個別・総合
プロジェクトに向けて 文教大学紀要 第12
集 1-11 1978
- 水島恵一 「体験と意識」研究の方法論 『体験と
意識に関する総合研究』第1集 文教大学人
間科学研究会 1-8 1979
- 水島恵一・上杉喬 編 イメージの基礎心理学
誠心書房 1983
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・
藤森進・岡田斉 『感情イメージ調査』につい
ての研究 — 年代を経た大学生においてみら
れた感情イメージ構造の安定性 — 文教大学
人間科学部紀要人間科学研究 第30号 121-
131 2008
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・
藤森進・岡田斉 『感情イメージ調査』につい
ての研究(Ⅱ) — 諸対象についての感情価尺
度の因果論的構造と性格次元との関連性 —
文教大学人間科学部紀要人間科学研究 第31
号 189-205 2009
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・
藤森進・岡田斉 『感情イメージ調査』につい
ての研究(Ⅲ) — 個別対象の感情イメージ構
造の安定性と対象語・感情語の選定 — 文教
大学人間科学部紀要人間科学研究 第32号
173-188 2010
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国
威・藤森進・岡田斉 『感情イメージ調査』に
ついての研究(Ⅳ) — 諸対象の感情価を推定す
るために有効な感情語の選定 — 文教大学人
間科学部紀要人間科学研究 第32号 173-188
2010
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威
対象語の感情的評価とイメージの鮮明性、空
想傾向との関連 — 「感情イメージ」の有意味
性の検討 — 日本イメージ心理学会第11回大
会発表論文集 40-41 2010.8.23-24
- 鈴木賢男 複合感情が向けられる諸対象の関連性
第27回ファジーシステムシンポジウム講演
論文集 1279-1280 2011.9.12-14
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 日本版
NEO-PI-R, NEO-FFI使用マニュアル 東京心理
株式会社 1999